中小企業あるある相談室

AI時代だからこそ問われる「ビジネスの基礎力」

企業を訪問し経営者と話をしていると、最近は必ずと言ってよいほど「AIをどう活用すればいいか」という話題になります。一方で、こんな嘆きを耳にすることも増えています。

「調べものを頼むと、AIの回答をそのまま持ってきて、『AIがそう答えていました』で終わってしまうんですよ」

確かに、AIを使えば、短時間でそれらしい回答を得ることができます。しかし、顧客や上司が求めているのは「AIが何と答えたか」ではありません。その内容が本当に正しいのか、自社や顧客の状況に当てはまるのか、そして「自分はどう考えるのか」まで示して、初めて仕事としての回答になります。

これは、AIの使い方というより、使う側の「ビジネスの基礎力」だと思われます。例えばAIに「当社の新規事業を考えて」と丸投げしても、それらしい案は返ってきます。しかし、市場環境、自社の強み、顧客ニーズなどを整理し、「何が課題なのか」「何を明らかにしたいのか」を考え、プロンプト（指示）に入れて問いかければ、回答の質は大きく変わります。

そこで必要になるのが、ロジカルシンキングやフレームワーク活用などの基本的なビジネススキルです。物事を分解して考える、具体的な事象から共通点を見つけて抽象化する、逆に抽象的な話を具体的な行動に落とし込む、などです。こうした力があれば、AIの回答に問いを重ね、より現実的で実践的な答えへと磨き上げることができます。

そして、もう一つ重要なのが「メタ認知」です。これは「自分が何を分かっていて、何を分かっていないのか」を客観的に把握する力です。AIはもっともらしい回答を返すからこそ、「ここは承認できる」「ここは確認が必要だ」という知識の境界線を、自分自身で認識する必要があります。さらに、最初から正解を求めず、仮説を立て、AIとやりとりしながら試し、修正する姿勢も重要です。失敗を恐れず、仮説→実行→検証→修正を繰り返す。これは何のことはない「仕事の基本」そのものです。

私は、AIは「知識やスキルの増幅装置」だと考えています。「ビジネスの基礎力」があり「メタ認知」ができる人が使えば、その能力を大きく高めてくれます。一方、考えること自体を丸投げすれば、「AIがそう言っています」と言うだけで思考は止まってしまいます。

これまでロジカルシンキングやフレームワーク活用などは、「身に付けておくと役立つスキル」だったかもしれません。しかしAIの登場によって、これらはAIを使いこなすための必須スキルへと昇華したように思います。

だからこそ、企業のAI活用支援では、ツールやプロンプトの使い方を教えるだけでは十分ではありません。時間はかかっても、考える力、問いを立てる力、AIの回答を評価し、自分の言葉で結論を出す力を育てる。AI時代になった今こそ、こうしたビジネスの基礎力を鍛える人材育成が、これまで以上に重要になっているのではないでしょうか。

中小企業診断士
秋島　一雄



◇秋島　一雄／あきしま・かずお
中小企業診断士。株式会社IAC代表取締役社長。商社にて営業職として米国・インドネシア・タイへの海外駐在を経験し、管理部門業務にも従事。その後メーカーでの営業経験を経て独立。2008年より現在に至るまで東京商工会議所コーディネーターとして中小企業支援に携わる。さらに東京都中小企業振興公社「企業変革スクール」講師兼チーフアドバイザーを務めるほか、大手研修会社、中小企業大学校、AFJ日本農業大学校、全国各地の商工会議所にて、海外展開・経営者塾・創業塾・マネジメントと育成・新人研修・営業展開・コンプライアンスなどでの講師として幅広く活動している。